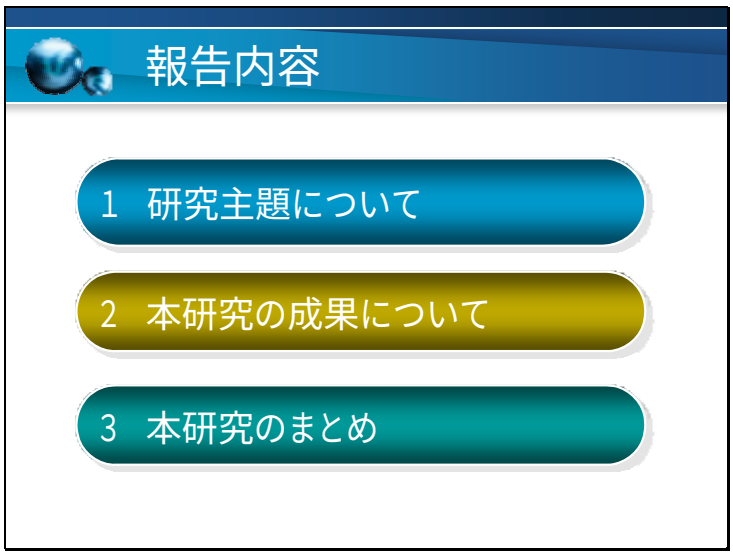
スライド 1

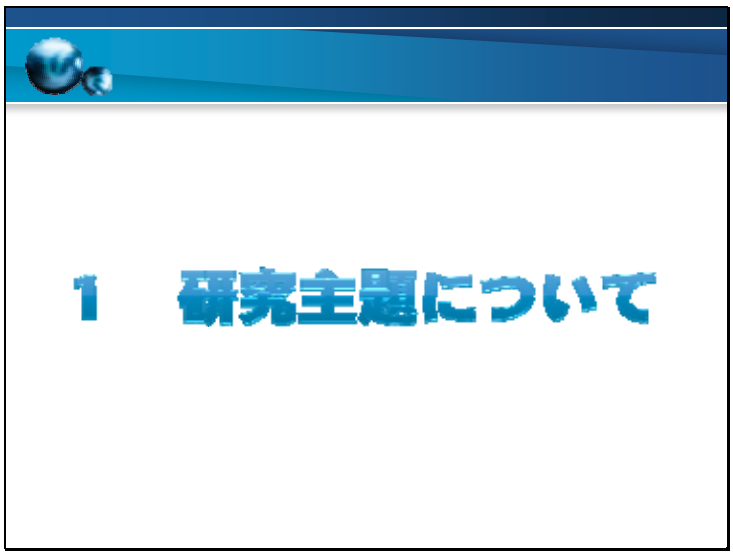
ただ今より　研究概要を報告いたします。

スライド 2



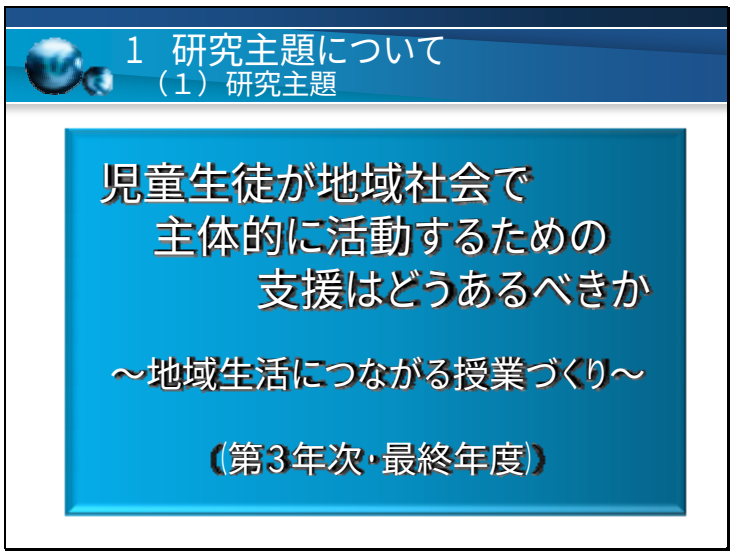
内容は、研究主題について、本研究の成果について、本研究のまとめの３つの順にお話しします。

スライド 3



はじめに、研究主題について　です。

スライド 4



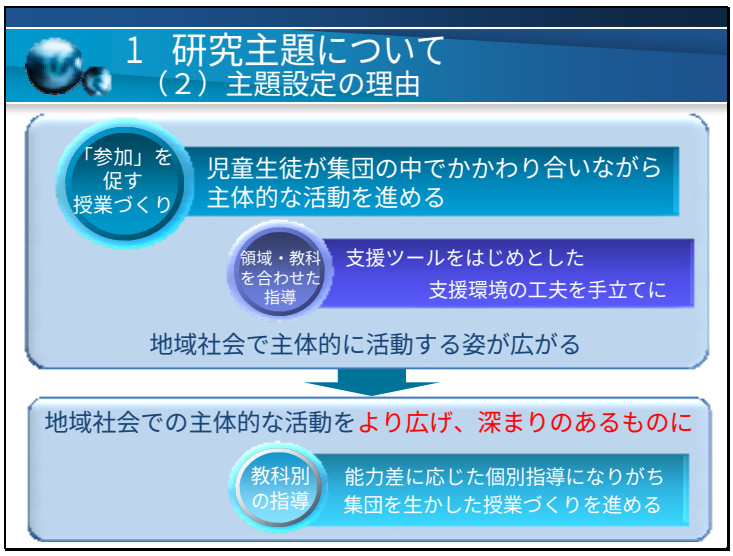
平成２０年度から、研究主題を

「児童生徒が　地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか

～地域生活につながる授業づくり～」と設定し、研究を進めました。

今年度は、第３年次、最終年度です。

スライド 5



本校では、これまで、児童生徒が集団の中でかかわり合いながら

主体的な活動を進める「参加」を促す授業づくりを進めてきました。

特に支援ツールをはじめとした支援環境の工夫を手立てとして

領域・教科を合わせた指導を中心に積み重ねてきました。

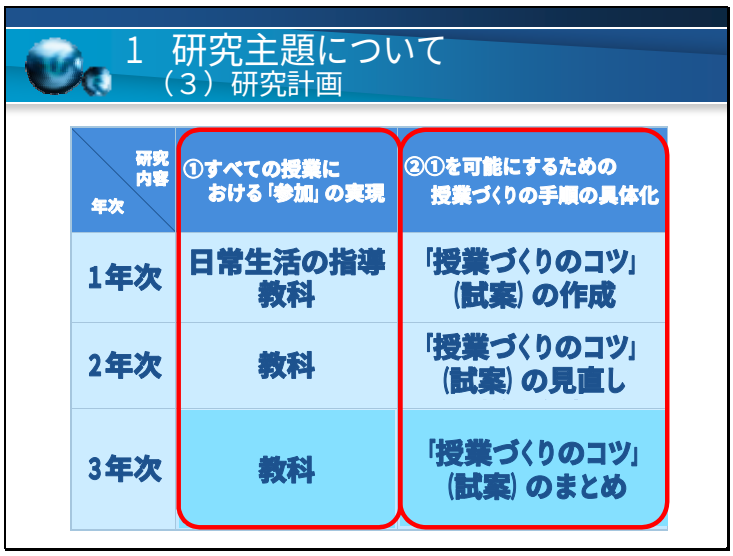
その結果、児童生徒が地域社会で主体的に活動する姿が広がってきました。

そこで、本研究では、地域社会での主体的な活動をより広げ、

深まりのあるものにするためすべての授業において「参加」を実現することが必要と考え、

その中でも能力差に応じた個別指導になりがちであった教科別の指導を対象に、集団を生かした授業づくりを進めました。

スライド 6



３カ年の研究計画です。

研究内容①は、今ほど説明した、すべての授業における「参加」の実現です。

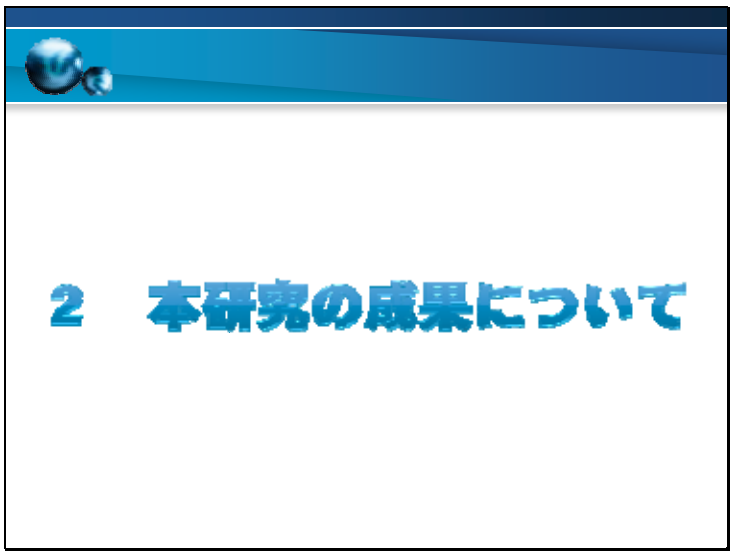
本年度３年次の計画を修正し、教科別の指導に絞って授業研究を進めました。

研究内容②は、研究内容①を可能にするための授業づくりの手順の具体化です。

誰でも、どの授業でも、年度が変わっても「参加」を促す授業づくりを一貫して実践していくために授業づくりに関する観点をまとめた「授業づくりのコツ」の作成を進めてきました。

今年度は、まだ試案の段階ですが最終年度としてまとめを行いました。

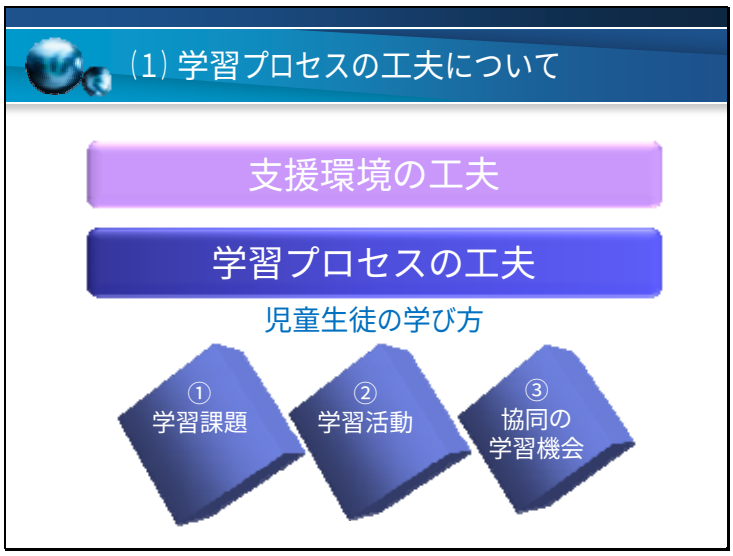
スライド 7



それでは、本研究の中で明らかになったことを

説明したいと思います。

スライド 8



これまでの領域・教科を合わせた指導を中心とした授業づくりにおいては、支援ツールを中心とした支援環境の工夫に取り組んできました。

教科別の指導を切り口とした本研究で、新たに明らかになったことは、

支援環境だけでなく、学習プロセスの工夫も大切であるということです。

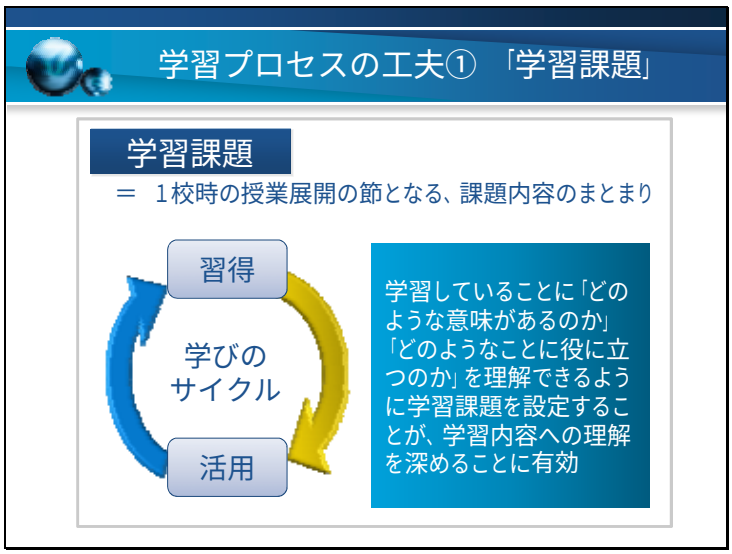
学習プロセスとは、児童生徒がどのように学んでいくのか、その学び方のことです。

その工夫として、学習課題、学習活動、協同の学習機会の３点から

取り組みました。

学習プロセスの工夫について、詳しく説明していきます。

スライド 9



学習プロセスの工夫の一つ目、学習課題についてです。

本校では、１校時の授業展開の節となる課題内容のまとまりのことを、学習課題と呼んでいます。

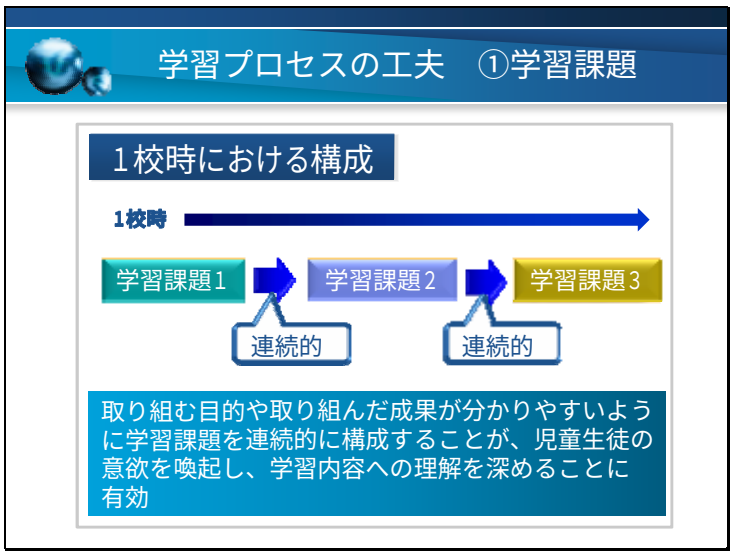
地域生活を想定した場合、学習課題を、　知識・技能の「習得」と「活用」の両方の視点から設定することが　必要です。

知識・技能を習得したら、活用してその定着を図る。　定着すれば、さらに新たな習得を行う。

本校では、このような習得→活用→習得の流れを「学びのサイクル」と呼んでいます。

この学びのサイクルを繰り返す中で、学習していることに、「どのような意味があるのか」どのようなことに役に立つのか」を理解できるように学習課題を設定することが、学習内容への理解を深めることに、有効であることが分かりました。

スライド 10



次に、学習課題の１校時における構成についてです。

１校時の授業には、複数の学習課題が含まれています。

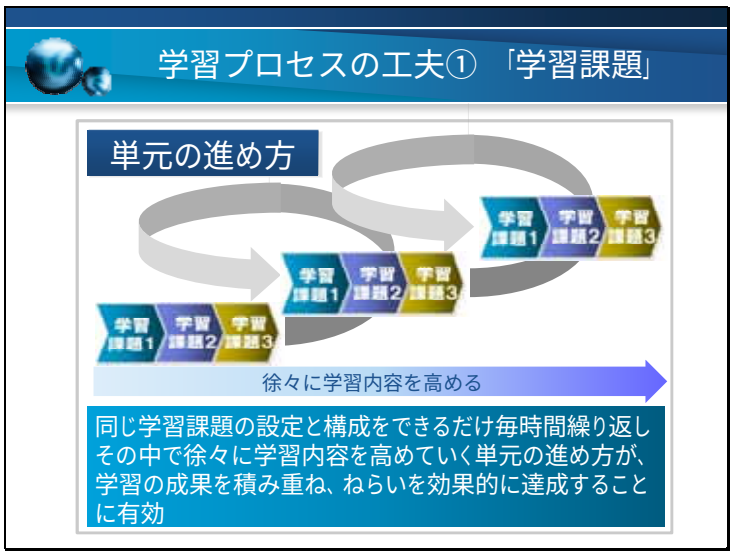
例えば、日記を書いたら、漢字練習、次は音読といったように単発的なものではなく、

取り組む目的や取り組んだ成果が分かりやすいように連続的に構成することが、

新しい知識・技能の習得を苦手とする知的障害のある児童生徒の意欲を喚起し、

理解を深めることに有効であることが分かりました。

スライド 11



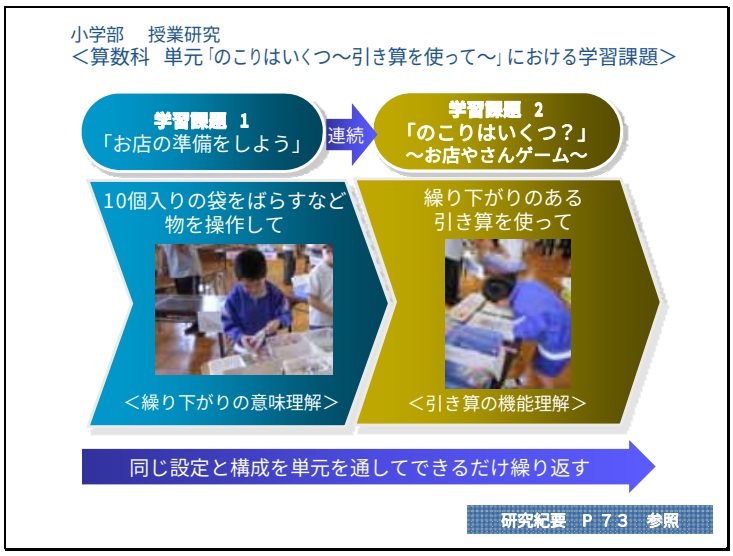
また、内容が変わる毎に学習課題の設定や構成が変わると

児童生徒はそのたびに学び直しをしなければならなくなります。

そこで、単元の進め方については、同じ学習課題の設定と構成をできるだけ毎時間繰り返し　その中で徐々に学習内容を高めていくようにしました。

そのことが、教科別の指導においても、学習の成果を積み重ね、ねらいを効果的に達成することに有効であることが分かりました。

スライド 12



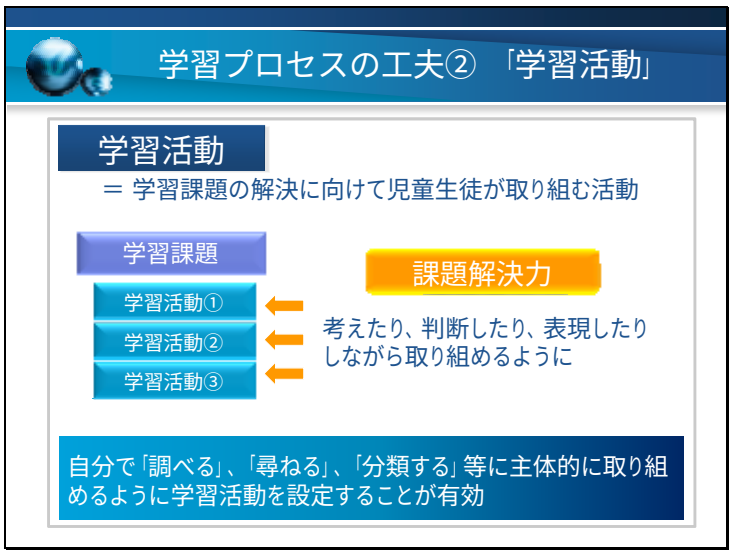
これまでの学習課題の成果について、具体例で説明します。

小学部算数科「のこりはいくつ」の実践は、繰り下がりのある引き算をねらいとして取り組みました。学習課題１「お店の準備」では、ただ計算の手順を覚えるだけでなく、

１０個入りの袋をばらす等の物を操作して繰り下がりの意味理解が図れるようにしました。学習課題１で学んだことを基に、次の学習課題２「のこりはいくつ？お店屋さんゲームでは、品物が売れて在庫はいくつになったか、繰り下がりのある引き算を使って残りを求めるという引き算の機能について理解できるようにしました。

そして、同じ学習課題の設定と構成を、できるだけ単元を通して繰り返した結果「いらっしゃいませ」とお客役の教師に声をかけ、次の問題を要求するなど、意欲的に取り組む姿が見られるようになり、繰り下がりのある引き算を理解し、２けた同士の引き算の筆算を正しくできるようになりました。

スライド 13



学習プロセスの工夫の2つ目、学習活動です。

本校では、学習課題の解決に向けて児童生徒が取り組む活動のことを、学習活動と呼んでいます。

各学習活動においては、課題解決力が育まれるように児童生徒が考えたり、判断したり、表現したりしながら取り組めるようにすることが必要です。

そのためには、自分で調べる、尋ねる、分類するなどに、主体的に取り組めるように学習活動を設定することが有効であることが分かりました。

スライド 14

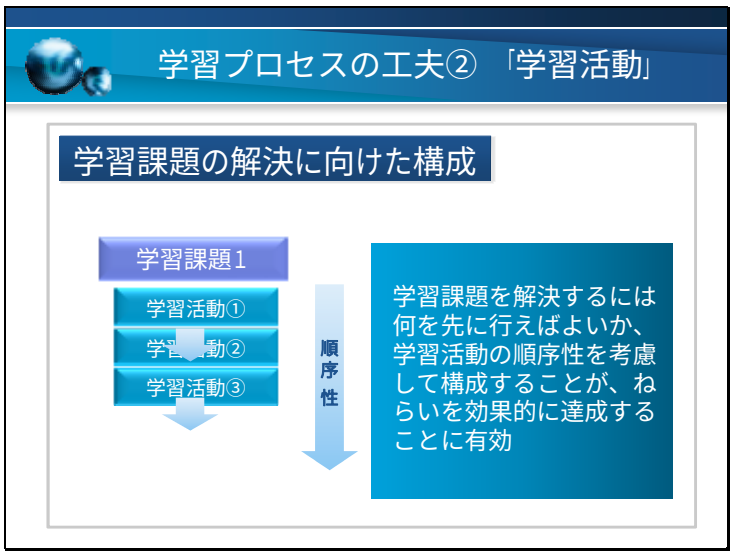
このような、学習課題を解決するために児童生徒が行う、調べる、尋ねる、分類する等の「行為」を本校では「学びの活動要素」と呼んでいます。

これらのことに取り組むのは、限られた子どもだけではありません。

本校がこれまで開発してきた「支援ツール」という手段があることで、どの児童生徒も、その子なりに調べたり、尋ねたり、分類したりすることができると考えています。

それぞれの「行為」をどのように行うのか、支援ツールのような「方法」を「課題解決のための手段」と呼んでいます。

スライド 15



また、学習課題の解決に向けて、学習活動をどのように構成するのかも重要です。

学習課題を解決するためには何を先に行えばよいか、学習活動の順序性を考慮して構成することがねらいを達成することに有効であることが分かりました。

スライド 16

本研究で見えてきた「学びの活動要素」と「課題解決のための手段」

順序性

学びの活動要素	各活動要素における「課題解決のための手段」
調べる 確認する 参照する	・辞書・辞典をひいて、　・電子辞書を使って　・インターネットを検索して ・資料や新聞記事を読んで　・教科書や本を読んで　・計算機で計算して ・ものさしや量りで計測・計量して　・前時を振り返って ・身体部位を使って概測して　・公式に当てはめて計算して　・ちらしを見て ・携帯電話で計算して　・手掛かりを
尋ねる、相談する	・口頭で　・文章や文字で　・携帯電話で
分類整理する	・決められた場所に　・順番に並べて　・優先順位をつけて ・比較し、共通点や違いを見つけて　・種類やカテゴリー別に ・要点をまとめることで
記録する	・写真やビデオに撮って　・絵やイラストで　・文字や文章で
試行する	・調べたことを基に　・尋ねたことや相談したことを基に ・分類整理したことを基に　・実際と同じ環境を整えて
報告する 発表する 説明する	・口頭で　・文字や文章で　・絵やイラストで　・図表やグラフに表して ・ポスターやレポートを作成して　・プレゼンテーションを作成して ・撮ったビデオを見返して
協議する 確認する	・所定の観点についてチェックして　・各自の思いや考えを述べることで ・代案を出し合うことで　・実際にやってみたり演じたりすることで ・今日の学習を振り返って

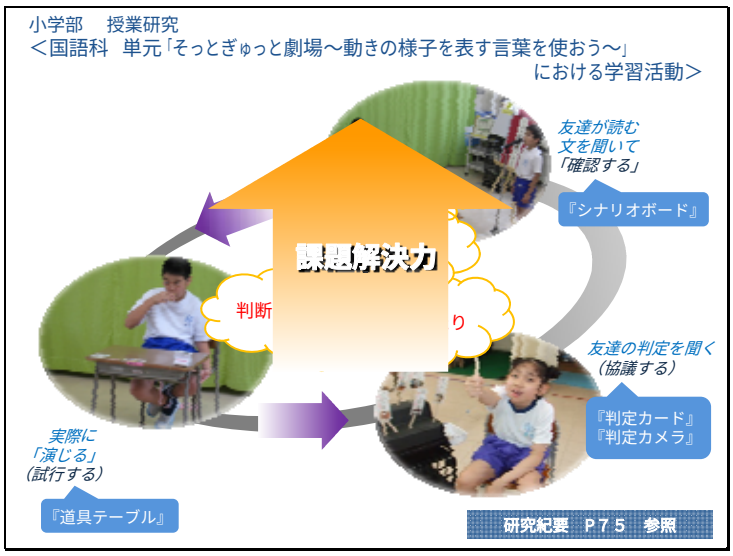
研究紀要　P７５　参照

この図は、この３年間に行った授業を振り返り、「学びの活動要素」と「課題解決のための手段」についてまとめたものです。

教科別の指導においても、このように多様な学習活動を通して取り組まれるようになったことは、本研究の大きな成果であると考えています。

また、実際の学習活動の在り方は多様ですが、基本的には上から下への順序に沿って学習活動を進めることが、課題の解決に向けて有効であることが分かってきました。

スライド 17



これまでの学習活動の成果について、具体例で説明します。

小学部国語科「そっとぎゅっと劇場」の実践は、動きの様子を表す言葉を使った３語文作りをねらいとして取り組みました。

シナリオボードを使って、友達が読む文を聞いて「確認」し『道具テーブル』から小道具を選んで、友達の読んだ文のとおりに実演を行い『判定カード』『判定カメラ』を使って、文の意味どおり実演できたか「協議」するという一連の活動の中で自分たちで間違いに気付いて、友達に働きかけて修正するなど、考えたり、判断したり、表現したりしながら取り組み、意味理解が曖昧だった言葉も理解して、３語文の意味通りに演じることができました。

このように、「学びの活動要素」と「課題解決のための手段」から設定したり、学習課題の解決に向けた順序性を考慮して構成したりした学習活動を毎時間積み重ねることで児童生徒の課題解決力が育まれると言えます。

スライド 18

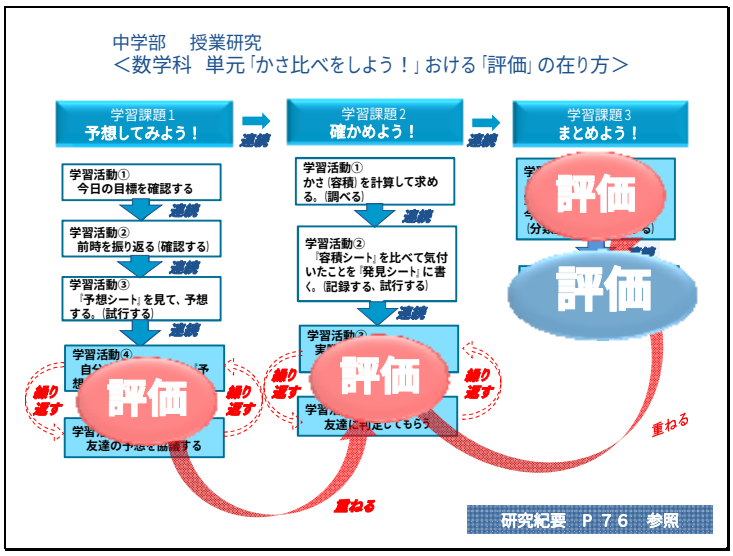
児童生徒の理解を深めるためには課題に取り組んだら終わりではなく、学習活動の中に「評価」する機会を設定することが大切です。

中学部国語科「劇をしよう」の実践は、セロ弾きのゴーシュを簡単にした、物語の内容理解をねらいとして取り組みました。登場人物役の生徒がせりふを言うたびに観客役の生徒がせりふをもう一度繰り返して、即時に反応を返したり友達が正しくせりふを言えたか、ビデオを見て振り返ったりして「評価」の機会を設定しました。

　その結果、様々な動物が出てくる順番を理解し、自分のセリフを言うだけでなく、友達の場面でも進んでセリフを言ったり身振りをつけて演じたりする姿が見られるようになりました。

このように、学習活動の中に「評価」機会をできるだけ多く設定することが、学習内容への理解を深めることに有効であることがわかりました。

スライド 19

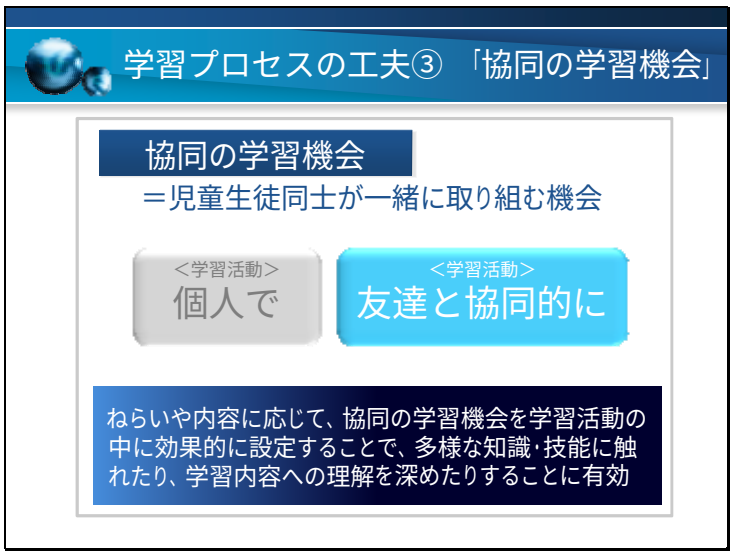


「評価」について、さらに別の例で説明します。

中学部数学科「かさ比べをしよう！」は、容積の意味理解、底面積や高さと容積の相関関係の理解をねらいとして取り組みました。この実践においては学習課題１において、予想を記録し、それを協議する活動の中で学習課題２において、実際に水を入れて発表し、その結果を判定する活動の中で学習課題３において、今日のまとめを行う活動の中でさらに、最後に今日の授業全体を振り返る活動の中で「評価」を設定しました。

このように「評価」を繰り返したり、学習課題ごとに重ねて行ったりした結果教師に容積を求める公式を最初から教わるのではなく友達の発表を見聞きする中で、生徒自身で底面積や高さと容積の関係に気付くことができました。

スライド 20



学習プロセスの工夫の3番目は、協同の学習機会です。

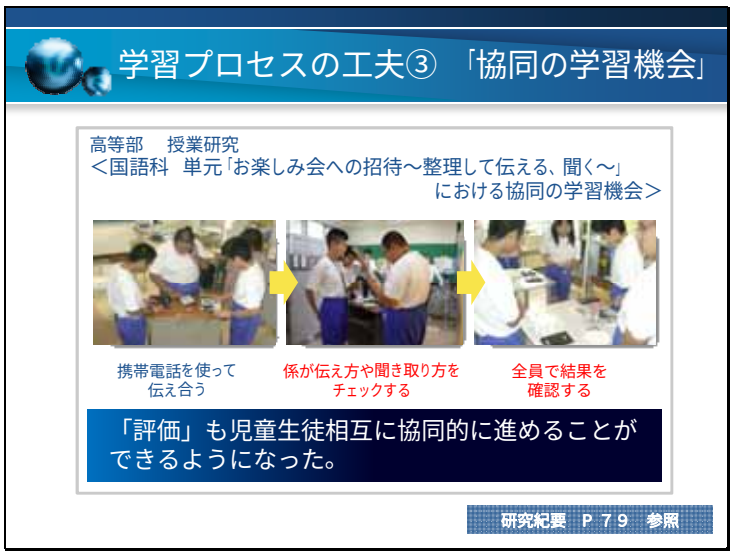
「学習活動」は、個人で行う場合と、友達と協同的に行う場合があります。

「協同の学習機会」は、児童生徒同士が一緒に取り組む機会」のことです。

しかし、どんな学習活動も協同で行えばよいと言うわけでありません。

ねらいや内容に応じて、協同の学習機会を学習活動の中に効果的に設定することで多様な知識・技能に触れたり、学習内容への理解を深めたりすることに有効であることが分かりました。

スライド 21

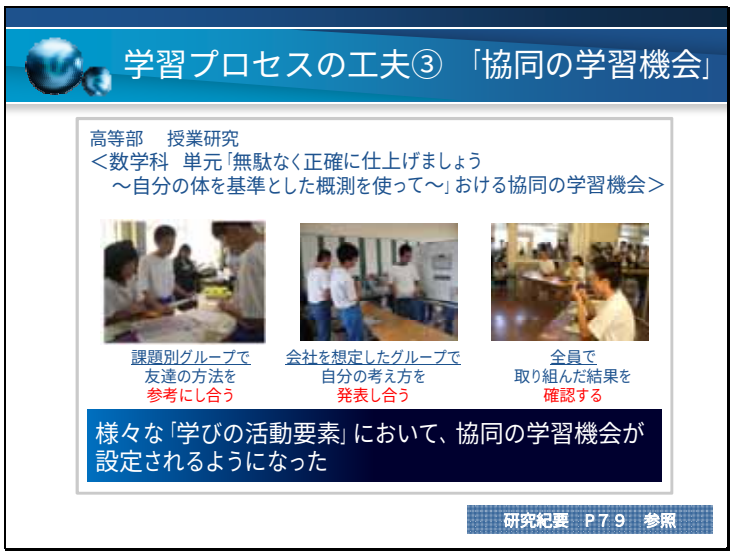


高等部国語科「お楽しみ会への招待」の実践は、整理して伝えたり、聞き取ったりすることをねらいとして取り組みました。

お茶会の実施について携帯電話を使って伝え合う中で整理して伝えたり、それを整理して聞き取ったりすることができたか係の友達がチェックしたり、その結果伝え合ったとおりに準備ができたか全員で確かめ合ったりするなど、学習したら、正解か間違いか教師がチェックして終わりではなく、自分の取り組み方や取り組んだ結果を友達に評価してもらうようにしたことで、「○○君、聞こえないよ。」「もっと大きい声で言って。」などの言葉が出たり、メモを書くために、より集中して聞こうとしたりする姿が見られるようになりました。

このように、「評価」も児童生徒相互に協同的に進めることができるようになってきました。

スライド 22

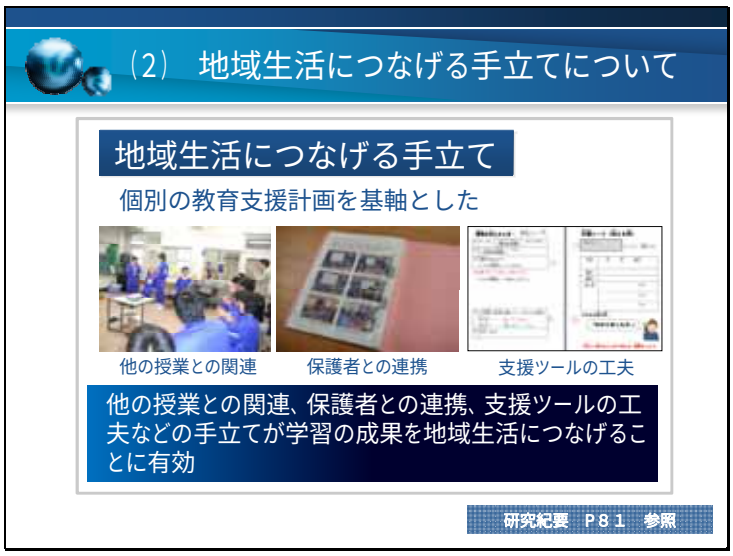


また、高等部数学科「無駄なく正確に仕上げましょう」の実践は、自分の体を基準とした概測を使った測定をねらいとして取り組みました。

様々なグループ形態での活動を織り交ぜ「課題別グループで、友達の方法を参考にし合う」、「会社を想定したグループで、自分の考え方を発表し合う」「取り組んだ結果を全員で確認する」などの様々な活動を協同して取り組むようにしました。

その結果、難易度の高い新しい課題にも「できます」と答え、友達が発表していた方法を使って取り組む姿が見られ、体の基準を使って、長さを測定できるようになりました。このように様々な「学びの活動要素」において、協同の学習機会が、設定されるようになってきました。

スライド 23

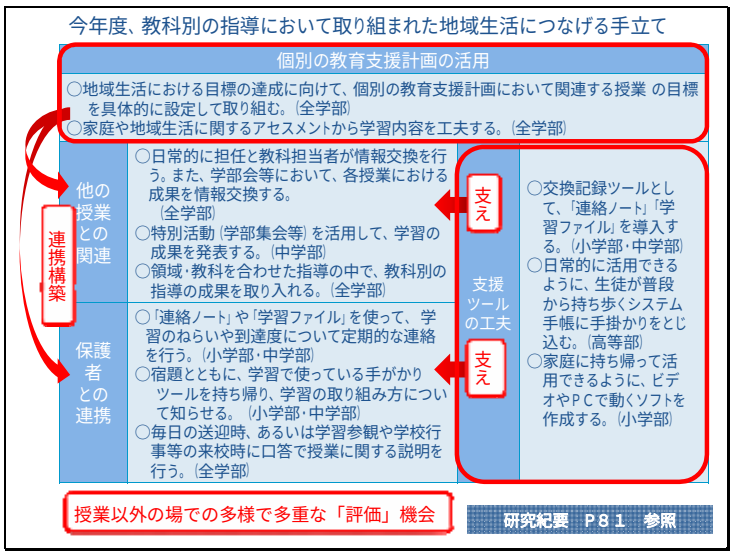


これまでは授業づくりにおける学習プロセスの工夫について説明してきました。

地域社会で主体的に活動する可能性を高めるためには、学習の成果を地域生活につなげる手立ても必要です。

各授業研究での取り組みの結果、個別の教育支援計画を基軸とした他の授業との関連、保護者との連携、支援ツールの工夫などが有効であることが分かりました。

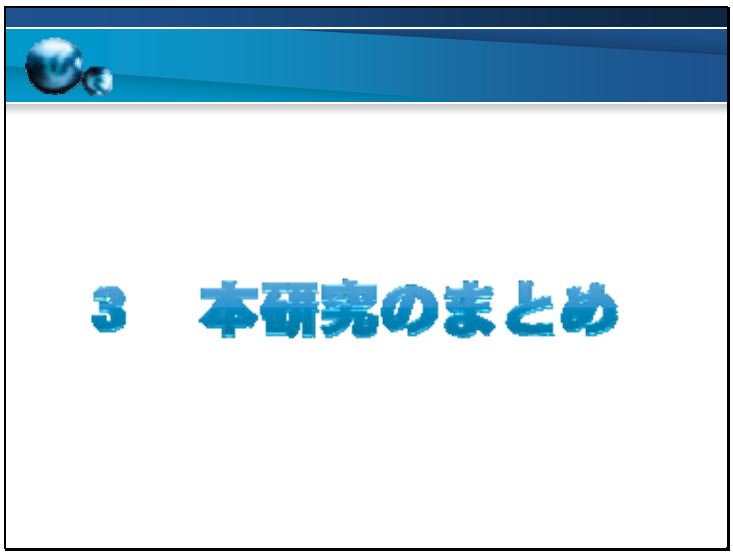
スライド 24



これは、今年度教科別の指導において取り組まれた地域生活につなげる手立ての一覧です。

教科別の指導においても、学習の成果を地域生活で生かすためには、個別の教育支援計画を基軸として他の授業担当者や地域生活の支援者の中核である保護者との連携構築を図り支援ツールを支えとしながら授業以外の場でも、多様で、多重な評価」の機会を設定することが様々な学習の基礎・基本となる教科別の指導だからこそ、より大切であることが分かってきました。

スライド 25



最後に、まとめ　です。

スライド 26

本研究で解明されたことをまとめます。

児童生徒の「わからない、できない」から「わかった、できた」まで、どのような学習プロセスで進むのか。

学習課題の工夫については、習得と活用の両方の視点から設定し、学びのサイクルを繰り返すこと然的なつながりのある構成にすること

学習活動の工夫については、学びの活動要素と課題解決のための手段を組み合わせて設定すること、課題解決に向けた順序性を考慮して構成すること、「評価」をできるだけ繰り返すこと

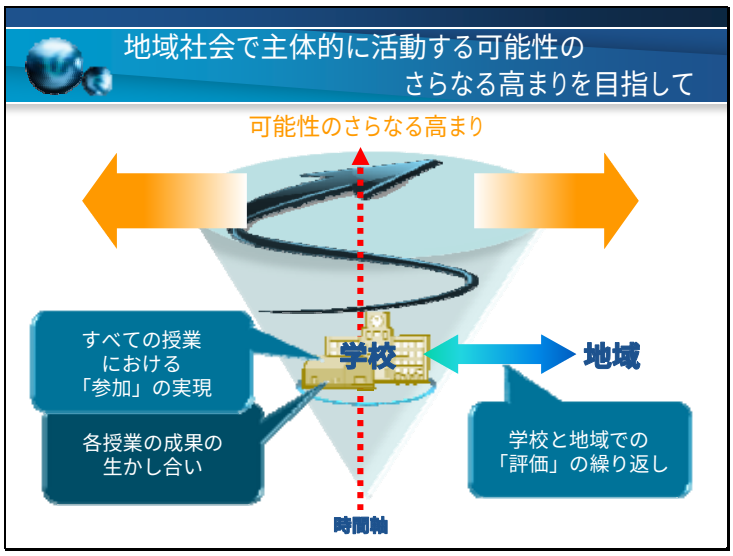
協同の学習機会の工夫については、ねらいや内容に合わせて効果的に設定すること

そして、単元を通して、同じ設定や構成を繰り返すこと

このような、連続的・反復的、スパイラルな学習プロセスの工夫を行うことで

教科別の指導における「参加」が深まっていくことが分かりました。

スライド 27



本研究を通して、児童生徒の能力差から集団による授業展開が難しい、教科別の指導、特に国語科や算数科・数学科等において「参加」を実現できました。

そのことは、すべての授業において「参加」を実現することが可能であることを示唆していると考えています。

学校生活の中核である授業、その、すべての授業において「参加」を実現する。そして、各授業の成果を生かし合い、同時に、学校と地域で評価を繰り返すことで、児童生徒の可能性をさらに高めることができると考えます。

このような授業の在り方を目指して、今後も授業づくりについて研究を進めていきたいと思います。

以上で、研究概要について報告を終わります。